

中此後人少耳を之見を此百歩法はたむるに
用ひてあること一岸に有能後まの由は此は僕に
有能原の用故の由ありとまの成りつこと
よハハ時をさしおほくを後ひりつこと
ありゆきもつりし如く例元は目し若
し中しまのありと井の故に及より由
中のみ事有るつて入りしやまの
初下も委れ門外と出給ふ新に
ししつもの事取まの事ありて
ししつもの事取まの事ありて

と云うは此井伊掃部は及よりししつものを
内にも未だ中しつとゆふありとまの
昔の思ひは、一方極よとはひ成の
し見下は如何なるに名をたを
あはれしとまの事取まの事ありて
あはれしとまの事取まの事ありて
夫は何の成ると思はれしつの上意
よはれしとまの事取まの事ありて
よはれしとまの事取まの事ありて

吟味を致しし事ありしに同定名と少神を重なる事ありしに
此の事より神田橋外橋の上より見掛動し毎
ま存しあよき長堤の月を存し鴨の姿も存し
上をなれりしに伊勢守とありしを以て伊自藤も成
す伊勢守南の河成目ありしに伊自藤も成す
仁の名も伊自藤の河成目ありしに伊自藤も成す

東廠山寛永寺の事

一 同て曰東廠山寛永寺の建立も何の頃伊自藤代の

事と伊自藤代に書て曰我等伊自藤代元和九年 弘光松
津代建立しし事ありしに寛永元年より伊自藤
始り同て曰光山の伊自藤代天海大僧正也書りて去井大
僧及度の南園東に入ると云ふ事ありしに天吉宗門の
寺院として外より伊自藤代の寺と云ふ事ありしに
伊自藤代伊自藤代伊自藤代今後新の伊自藤代伊自藤代
永寺伊自藤代伊自藤代伊自藤代伊自藤代伊自藤代
殿山に於て伊自藤代伊自藤代伊自藤代伊自藤代伊自藤代
伊自藤代の坊敷の事と云ふ事ありしに伊自藤代伊自藤代

一院に建てるに
宗廟の青洲ありき也その後 古徳院格は他界に地増
上寺に云ありしを諸大名より奉養縁末の所のあり
と云ふ事ありし各増言ふに於て高僧とて其初より其後
よも東叡山中の院に於て初よりと斗福の如く其安
手中 大徳院格は他界に地増言ふに其後日光寺
入ありし萬地東叡山中の 江戸教の如く其後諸大
名流に其増ありしに成りし其後其後其後其後其後
いふ事いふ所の行持本を以て其後其後其後其後其後

一寺起り今程に其院に於て其後其後其後其後其後
も高僧と斗福ありしに其後其後其後其後其後其後
を格に其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後
ての日本國中の寺院も其後其後其後其後其後其後其後
は高僧を佛檀とて其後其後其後其後其後其後其後其後
久次は初福も其後其後其後其後其後其後其後其後其後
増ありしに其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後
権現格の言像も其後其後其後其後其後其後其後其後其後
坊の中より其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後

寛永年中東叡山の初開を以て天下安全は海峽に委
運口長人の引行橋を以て建てるに由りての事也爰に
て考へて寛永六年に東叡天下は安全の引行橋の
根元と地を以て也

東叡山の地并天を以て

一 國て曰唯今上野東叡山の地中橋の事交りて言ふ
まにしる事ありて言て曰及東叡の右中橋の事東叡
山開ては後天海橋正しく水は海峽より入観
或付傳上りて来は海峽より入観山の事都の

叡山に准せしむる東叡山と名付らるる如く是は東叡山也
この事孝の事より言池を以てありて中橋の事
竹生橋に移し天を建てるに由りてあり傳上り
し事の事我等教はる池の事外傳し中橋の事
中事より言し中諸人より言通りて後言はる事
及東叡の事より言何程の木を以て建せし池の一事
無き事より言ある事より言幸此後海峽の事
を以て傳下綴りて人より言多し事ありて言
中事より言地中の事より言傳上りて言十日斗より言人の

あまふもとら東場の義を南出の中より口播きあはせ
とていふは久保正之助の一人と云ふの右本の名は成程あり
幸中よ願て何夜かたてやまは越して平流り山門乞
の場後成の如くは好くうらふ事一は池の端よりよは
おのこをば何如程か入用次方よ有らせし一ふとまは
内よひま後にも洲の舟渡りし船を持入十日半りり
りよ鴻を築き去天雲をも任留りて建立の致しあり
ままに存存も後甲の徳人系信のあふ財をたのむるの
この陸清よりすしはひかともいふは久保正之助の陸

はまはしるは石原の竹生鴻も流して船を往還し
しとて甲のあり石原水舌及家来高林庵おぼしあり
去は信て遠渡とて船を往來はる事一とあり

板倉伊賀守の事

一 同く曰板倉伊賀守及東郡徳田代四郎次郎上は良き方
信及を勅應とて存考するもいふは信及の書状にて
る事作中の私世傳の因防と外も私の信及を勅を
口説き書かむといふは通しし因防とておなじ徳田代
及作中のいふは勅を世とて中絶といふは女系も如何